

平成 2 3 年度

《第 4 回》

# 国 語

時間 5 0 分， 1 0 0 点満点

## 受験上の注意

1. 解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 解答は、解答用紙の所定のところに記入してください。記入方法を誤ると得点になりません。
3. 試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも提出してください。

郁文館中学校

一、次の文を読み、後の問いに答えなさい。

ガーデニングは健康にもよく、庭やベランダがきれいになって大変結構。でも一人で行うのはちよつと気が重いので誰か手が欲しい、とか、たまに友人のところに遊びに行きたいのだけれど、水のやり忘れが心配で「A」「」、といった話をよく耳にする。

(X)、「いつも庭をきれいにしたくてガーデニングを始めたのに、せっかく植えた草花がパーツと一回咲いただけで、あとは次々と咲いてくれない。がっかりした」といったつぶやきも耳に入る。これはチューリップや百合が咲き終わったあとで聞かれる話だ。こうした方々の頭の中には、常に花がいっぱい咲き続け、放っておいても二番花が咲いてくれる、そんな庭にしたい、といった欲張りずくめの考え方がいっぱい詰まっているのではないか、と思う。

例えば桜の花見を考えてみよう。桜は年に一回しか咲かない。さらに雨風に当たると、aカンショウウできるのはせいぜい一週間ぐらいの年もある。秋の紅葉にしても同じことで、美しく色づいた葉を何回も楽しめるわけではない。元来、こうしたはかなさをb備えているのが植物という生き物であり、そこに巡りくる季節感や、喜びや淋しさ、といった人の感性に触れるよさがあるうというものだ。そうした①はかない詩情があるからこそ、詩や歌や、絵の好材料ともされてきたのである。

(Y)花づくり、野菜づくりを始めるときはなんといっても、開花や収穫という目的に向かってしつかり日々の仕事を行うべきで、花が開いた、といつては家族で喜び、野菜がとれた、といつては皆で食べて味のc善し悪しを話し合ったり、虫に食われてしまったことを残念がったり。そうしたことを目標にして家族みんなで楽しむ園芸を実行してみてほしい。また、草花や野菜だけでなく、庭木にしても、小さな苗木から自分の手でこれを育て、よい形に仕立てるために努力をしたり、あるいは花を咲かせるための工夫を続けることが園芸への第一歩といつてよい。

これはいわば、②義務教育を受けているのと同じと考え、面倒でも行つてほしいが、その段階に止まつてはだめ、学校でいえば、高校・大学へと進んでほしい。

それは何かといえ、植物を育て花を咲かせる、という行為は人生にどんな影響を与えるのか、ということや、自分は植物や花から何を学んでいるのか、といったことについてほ思いを馳せていただきたいということだ。

庭一面に花を咲かせ、その中でお茶を飲んだり、友人と談笑したり、といった夢を持つてガーデニングを行うのも結構なことだ。こうした夢を持ち、そこに突き進む人の意思こそが大事だし、一つの修業と考えれば、日々の手入れの時間は惜しくないはずである。花一面に咲いたところに立ち、これを誰かに写してもらい、人生の一つの記念としてアルバムに貼るのもよい。「写真に残そう」と考えれば、雑草がいっぱい生えているところを写したのでは、長く記録として残るので、恥ずかしくて人には見せられない。そこで雑草もしつかり抜き取り、枯れた株は補植をして花壇の化粧を完了し、そこにたたずんでニッコリとカメラにdオサまる。こうした写真をいくつもe拝見しているが、これはこれで結構なことであり、その方の努力と集中力を高く評価しなければいけない。

(Z)、「これだけで止まってしまうのでは、せっかくのガーデニングを行つた、③本来の目的には到達していない。先にも挙げたように、これを行つて何を得たのか、どんな

得があつたのか、といったことを考えてみるのも必要だろう。あるいは花を育てながら自分は何を学んでいるのだろう、といった「 B 」もたまには行つてよいのではないだろうか。

そうすることで、自分の中に今までにない何かを発見できたとしたら、あなたがガーデニングを趣味として選んだのは幸福な選択だったことになる。ただし、これは自分で選んだ植物を自分で育てたときにのみいえることだ。人を頼んで花づくりをし、花といった結果だけを目的に行うのでは、園芸本来の目的から離れてしまう。

ガーデニングという言葉は、一世を風靡した流行語でもあり、また響きのよい言葉なのですぐに使いたくなるが、本当のガーデニングとはあくまでも自分で行う、というのが大前提だ、ということをお忘れなく。植物から何かを学ぶ、といった気持ちで接すると、すぐに技術は上達するものだ。

(江尻光一『至福の園芸』より抜粋)

問一 二重傍線部 a と e のカタカナは漢字に改め、漢字は読みを答えなさい。

問二 (X) と (Z) に入れる適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。  
ただし、同じ言葉を二度使わないこと。

ア しかし イ つまり ウ また エ だから オ さて

問三 「 A 」には、本来必要な言葉が省略されています。適切な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 誰か手が欲しい イ 遊びに行けない ウ ちょっと気が重い エ 大変結構

問四 「 B 」に入る四字熟語として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自画自賛 イ 自暴自棄 ウ 自作自演 エ 自問自答

問五 波線部「一世を風靡」とは、どのような意味だと考えられますか。適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 世界中に大きな風を起こす

イ 世の中に強い影響を与える

ウ 一世の間、風を吹かせる

エ 次の世代に強く働きかける

問六 傍線部①「はかない詩情」とありますが、具体的にはどのようなものですか、文中から三十字で探し、最初と最後の五字を答えなさい。(読点も字数にふくみます)

問七 傍線部②で使われている比喩(たとえ)について、次の i、ii の問いに答えなさい。

i 筆者が「義務教育」とたとえている内容と同じものを指す七字の表現を文中から探し、書き抜きなさい。

ii 筆者が「高校・大学」とたとえている内容を説明した文として、適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 園芸を通して人生について考え、学びを得ようとする

イ 花壇をととのえ、見栄えのよい庭になるよう心がける

ウ 年に一回しか咲かない花について、一年中考え続ける

エ 庭一面の花の中で友人と談笑しお茶を楽しもうとする

問八 傍線部③「本来の目的」とは何ですか。その内容を説明した次の文の（ ）に  
合う二十字以内の文を考え、答えなさい。

ガーデニングを通して（

）こと。

問九 筆者の主張として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。  
ア 花や木を育てることは、人生についての大切な学びの機会ととらえるべきだ。  
イ 植物から何かを学ぶつもりで園芸を行えば、技術はすぐに上達するものだ。  
ウ 園芸を単純なものと捉えず、人生の記念・記録として楽しむ努力をすべきだ。  
エ 健康によく、ベランダが美しくなる園芸に対して真面目に取り組むべきだ。

二、次の文を読み、後の問いに答えなさい。

土曜日の午後、うめ立て地には、いつもの顔がそろった。  
小屋のまえの岸<sup>しづみ</sup>べきに、行方不明になっていたジャンボ・シーホース号と、ボートがつながれている。嗣郎<sup>しろう</sup>がひとりで水門のところからひっぱってきただけ。

一週間、海水につかりっぱなしになっていた船は、びっくりするほどみすばらしくなっていた。船体は、こわれた右の舷側<sup>げんそく</sup>をわずかに海面に出して、あとは水中にしずんでしまっている。船の浮力というより、材料の浮力で、ようやく水面に顔を出しているといった状態だった。

「これじゃあ、なおしやうがないなあ。」

船づくりにいちばんハッスルしていた勇<sup>むさし</sup>も、沈没船同様の船体を見たとき、あつさり<sup>いさじ</sup>を投げしまった。

「あああ、一か月苦労して、ばかみちやった。」

「おれたちだけで大きな船つくろうってのが、やっぱりむりでしたねえ。」

誠史<sup>まことし</sup>と勇の会話をききながら、嗣郎<sup>しろう</sup>がたすけをもとめるように雅彰<sup>まさあき</sup>をふりかえった。雅彰は、そつと目をそらして邦俊<sup>くにとし</sup>を見た。邦俊は、いつものとおり、にやにやわらいながら、誠史と勇の会話をきいていた。

嗣郎には、わけがわからなかった。つい一週間まえまで、あれだけむちゅうになつてつくっていた船ではないか。①それをたった一週間やそこらで、こうもあつさり投げだしてしまうのか。

もちろん、ジャンボ・シーホース号の構造には、嗣郎も最初から疑問を持っていた。べつに父ちゃんにならったわけではないけれど、大きな材木をつかう場合には、それなりのやり方がある。まして船のような乗り物なら、よほど丈夫<sup>じょうぶ</sup>につくらないと役に立たないだろう。ということは予想がつく。ただ木と木をくぎでとめて、形をととのえればできあがるものではないと、うすうすは感じていた。

でも、失敗すれば、それを1キョウクン<sup>きょうくん</sup>にして、新しくつくりなおせばいい。勇たちもたぶんそうするだろう。嗣郎はそう考えていた。

ところが勇たちときたら、自分たちのつくりかけた船を目のまえにしながら、あつせりと船づくりを投げだすという。

嗣郎は、よほど、その理由を問いつめてやろうかと思った。だが、嗣郎にはそれをする勇氣はなかった。そんなことをすれば、たちまちここに遊びにくるなといわれそうな気がした。嗣郎には、それがなによりこわかった。

嗣郎にとつて、勇や誠史や雅彰や邦俊は、なにか人種のちがう雲の上の人間たちのような気がする。そんな子どもたちと、こうしていっしょにすごさせてもらうだけでも、2カ<sup>ニ</sup>ン<sup>シ</sup>ャ<sup>シ</sup>なくてはならないのだ。

子どもたちには「できる子」と「だめな子」の二種類があると、嗣郎は確信していた。嗣郎は小学校に入学以来、いや、そのずっとまえ、ひよつとしたら生まれたときから、「だめな子」だった。「だめな子」は、どんなに努力しても「できる子」にはなれないし、大きくなれば「だめなおとな」になるにちがいない。父ちゃんも母ちゃんも、やつぱり小さいとき「だめな子」だったから、大きくなっても「だめなおとな」にしかならなかったのだ。

だめな子にも、いろんな種類があつて、たとえばけんかのつよいやつとか、人をわらわせるのがうまいやつは、けっこうたのしくやつていける。だけど、なんの特技も、3<sup>根</sup>性<sup>性</sup>も持ちあわせていないやつは、だめな子の仲間うちからもこづきまわされ、ばかにされる。そんな最低の子にできることといえば、せいぜい自分よりいくらかましなa<sup>連</sup>中<sup>中</sup>におべっかをつかつて、子分にしてもらうほかなかった。

嗣郎は、いままでそうやつて、なんとか生きてきた。

そんな嗣郎が、まったくii<sup>い</sup>ひ<sup>ひ</sup>よ<sup>よ</sup>ん<sup>ん</sup>なこと<sup>な</sup>から、「できる子」のなかでも最高のグループと、つきあつてもらえるようになったのだ。

あれは三月だったか四月だったか、家のちかくで自転車にのつた大道邦俊に出あつた。邦俊とはクラスもいっしょだったから、あえば口ぐらいはきく。

「どこにいくの？」

嗣郎の質問に、邦俊は、

「うめ立て地。」

と、みじかくこたえた。嗣郎はそれまで町はずれのうめ立て地にいったことがなかったし、邦俊がなぜそんなところに行くのか、多少4<sup>キ</sup>ョウ<sup>ウ</sup>ミ<sup>ミ</sup>があつた。だから、ほんのあいさつがわりに、

「いっしょにいい？」

と、たのんでみた。邦俊は、5<sup>イ</sup>ガイ<sup>イ</sup>とあつさりうなずいた。嗣郎も、まさかそこが育英塾にかよう子どもたちのひそかなたまり場とは、思つてもみなかった。だから、すぐにかえろうとした。しよせん自分とは人種のちがう連中といっしょにあそんだつて、ろくなことはない。

案の定、b<sup>連</sup>中<sup>中</sup>は嗣郎のことを\*うさんくさい目で見た。だがふしぎに、②面<sup>面</sup>とむかつて「かえれ」というやつはいなかった。

やつぱり「できる子」は、ちがうな。嗣郎はいったんは感心したけれど、じきにc<sup>連</sup>中<sup>中</sup>の本心がわかつた。

d<sup>連</sup>中<sup>中</sup>はいわれないのではなくて、いえないのだ。「できる子」という人種は、みずから手をよごしてよい者をいじめたり、いやなやつをしめだしたりするのがにがらしい。まして、あいてが人種のちがう「だめな子」とわかれば、\*おうようにふるまうか、でな

かったら、まるで無視してしまう。それしかできないのだ。

嗣郎は、ずうずうしくかまえることにした。他人の顔色をうかがって行動することにはなれていたから、けつしてぼろをださないようにして、いつのまにかうめ立て地の小屋にくることを黙認もくにんさせることに成功した。

しかし、いくら〈できる子〉とつきあっても、うめ立て地を一步出れば、嗣郎はやはり〈だめな子〉でしかなかった。学校でも家でも、そしてだめな子の仲間うちでも、そのようにあつかわれた。

だけど、うめ立て地にかようようになつてから、嗣郎はそんなe連中e連中を、ひそかにばかにできるようにした。

「なにいつてやがる。こっちは育英塾にかよつてるエリートとつきあつてるんだぞ。」

そう、心のなかで**iii毒**づいてやることができた。

船づくりは、うめ立て地の小屋での嗣郎を、いま一步、③連中e連中のなかへくいこませる絶好のチャンスだった。

いままでも必死で四人の顔色をうかがい、④おべつかをつかつて、なんとか仲間にいれてもらつていたのが、⑤船をつくるうちに、いつのまにか**嗣郎を連中と対等にしてしまった**のだ。

こんなにあつかりと自分が、〈できる子〉と対等につきあえるなんて、嗣郎は思つてもいなかった。のこぎりのつかい方がうまいとか、かなづちのあつかい方をこころえているとか、たつたそれだけのことで、育英塾にかよつているほどのエリートが、嗣郎のことをみとめてくれるとは思ひもよらなかった。

嗣郎は、うれしかった。だからこそ、父ちゃんの大工道具まで持ちだして、一心に船をつくつたのだ。

嗣郎は、この一か月のあいだにつくりあげた自分のポジションが、あの船と同様、ずぶずぶと海中にしみみかけているのを感じた。

「じゃあ、いこうか。」

〈できる子〉たちが、そういつて歩きだした。嗣郎はだまって防波堤のそばに立ちつくす。

「じゃあね。」

〈できる子〉のひとりが嗣郎をふりかえる。

⑥ちくしょう！ 嗣郎は心のなかでさけびながら、精いっぱい笑顔をつくり、手を振つてこたえる。

（那須正幹『ぼくらは海へ』より抜粋）

\* うさんくさい・・・なんとなく疑わしい・怪しい

\* おうよう・・・ゆつたりしていて細かいことを言わないこと。

問一 二重傍線部1～5のカタカナを漢字に改め、漢字は読みを答えなさい。

問二 波線部 i ii iii の意味として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

i さじを投げる

ア：あきらめる イ：八つ当たりする ウ：すくいあげる エ：不要なものを捨てる

ii ひよんな

ア：どうでもいい イ：ひよろついている ウ：飛び跳ねるような エ：思いもつかない

iii 毒づく

ア：毒をつける イ：ひどくのしる ウ：悪いことをする エ：悪い点を指摘する

問三 傍線部①「それ」の内容を示している適切な語句を文中から探し、四字で書き抜きなさい。

問四 傍線部②「面とむかって「かえれ」というやつはいなかった」とありますが、「連中」が「かえれ」といわなかった理由を、文中の言葉を使って三十字以内で書きなさい。

問五 傍線部③「連中」とあるが、a s e の中で、傍線部③とは違う集団を指しているものを二つ選び、記号で答えなさい。

問六 傍線部④「おべっかをつかって、なんとか仲間に入れてもらっていた」のは何のためですか。不適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分は「できない子」の中でもできないほうだと思っているため。

イ のこぎりのつかい方やかなづちのあつかい方を教えてもらうため。

ウ 自分をばかにしているような連中を、かげでばかにするため。

エ うめたて地にいれば、自分も「できる子」の仲間入りができるため。

問七 傍線部⑤「船をつくるうちに、いつのまにか嗣郎を連中と対等にしてしまった」のは、嗣郎のどのような行為によるものですか。文中から五十字以内で適切な部分を抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。（読点も字数にふくみます）

問八 傍線部⑥「ちくしょう！ 嗣郎は心のなかでさけびながら、精いっぱい笑顔をつくり、手を振ってこたえる」とありますが、この時点での嗣郎の気持ちとして適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 船づくりをあつさり投げ出す理由を問いつめたいが、その勇気がなく、黙っている。

イ 船のつくり方がへたな勇たちに説教したいが、めんどろでやる気がなくなっている。

ウ 「できる子」の仲間入りを果たしたため、思うような行動がとれず、もどかしい。

エ 仲間だと思っていた勇たちが、当然するはずのことをしないため、ばかにしている。